

外来語サ変動詞における日本語母語話者の許容状況 —I-JAS に基づく例文を用いた調査から—¹

南 亜希子 (金沢大学大学院生) †

The Tolerance of Loanword Verbs among Japanese Native Speakers: From the Survey with I-JAS

Akiko Minami (Graduate school, Kanazawa University)

要旨

「ドラマが／車がヒットする」のような外来語サ変動詞についての研究は、サ変動詞化の基準を始め十分に解明されていない。本研究では、外来語サ変動詞における日本語母語話者の許容状況を明らかにするため、I-JAS (国立国語研究所) に出現した外来語サ変動詞に対する日本語母語話者の許容度調査を行った。I-JAS から収集した 73 語のうち、BCCWJ の出現状況や外来語辞典等の用例と照合し、まだ十分に日本語として定着していない外来語サ変動詞 57 語を選出した。その上で、大学・大学院生 89 名から容認度判定を得た。調査の結果、外来語名詞と同様に「意味の縮小・特殊化」が外来語サ変動詞の許容度にも大きく影響しており、日本語に借用された際に意味の縮小や特殊化が起こっていると、原語の意味でのサ変動詞の許容度が低下することが分かった。これらの成果は、外来語の動詞化や、「日本語の外来語／外国語」の判断に関する基準の明確化に貢献し得ると思われる。

1. はじめに

日本語における外来語使用は、外来語名詞の単体使用のみならず、「ヒットする」「ゲットする」などのように、外来語に「-する」が付いて動詞らしく使われる (以下、「外来語サ変動詞」) 用法もある。しかし中には、「トゥギャザー (together) する」「エクスペリメント (experiment) する」などのように、日本語母語話者にとってあまり馴染みの無い、すなわち、日本語の外来語の中ではあまり「日本語っぽくない」、「外国語っぽい」響きを与える外来語サ変動詞も存在すると考えられる。果たしてそれらの外来語サ変動詞のうち、「『日本語らしい』語」と「『外国語らしい』語」の基準は如何であるか。

2. 先行研究

2.1. 外来語の意味変化に関する研究

Shibatani (1990) は日本語における意味変化について、(i)意味の縮小・特殊化 (ii)意味の拡大 (iii)意味転換 (iv)意味の格下げ・悪化 の 4 種類があるとしている。その中でも、(i)意味の縮小・特殊化 (「ライス」「ステッキ」など) (iii)意味転換 (「アベック」「フェミニスト」など) が日本語の外来語において特に顕著であると述べている。これは、外来語が他の語種 (和語・漢語) と比較して、使用が特定の範囲に限られる語や意味の狭い語が多く、語使用の「棲み分け」が見られるという特徴にも関連する (沖森・阿久津編, 2015) と考えられる。

† minaki[at]stu.kanazawa-u.ac.jp

¹ 本稿は、2019 年度立命館大学文学部卒業論文に加筆修正を行ったものである。

また、鳥飼（2007）は日本語の外来語が元となる語（英語）としばしば意味が異なる例から、言語の背景にある文化の違いが生じていることを示唆している。その一方、Horie & Occhi（2001）は外来語の意味変化の過程について、英語動詞由来の外来語は、日本で本来慣習化していなかった行動などを記号化するために取り入れられた半専門用語であることが多いため、必ずしも原語の語彙的意味を保持しているわけでは無いと主張している。

2.2. 外来語のサ変動詞に関する研究

風間・上野・松村・町田（2004）はサ変動詞について、接尾辞「-する」は動詞「する」の意味が薄れたものであり、本来は漢語動詞（「計算する」「選挙する」など）を作る際に使われたものが、現在ではあらゆる語を動詞化する汎用的な役割を担うと述べている。更に筆者らは、「トラバーク」「ブレイク」などの外来語に接尾辞「-する」を付けることによって、より外国語らしい表現になり得ることを示している。

しかし、外来語サ変動詞に関する研究は未だ数が少なく、事例研究が多数を占めている。Horie & Occhi（2001）「ゲットする」や茂木（2015）「マークする」などが挙げられ、それぞれ日本語母語話者の認知的側面と統語的特徴の観点から分析された。また、外来語サ変動詞の研究情勢について Mogi（2012）は、外来語サ変動詞の一般的な文法的規則が、未だ明らかになっていない点を指摘している。その上で、これらの規則の明確化に向けて、事例研究を積み重ねていくことの重要性を説いている。

一方、澤田（1993）では、日本語教育に関連する基本語彙資料に基づいて、外来語における基本語彙の選定を行い、接辞「-する」が付くと考えられる外来語から、外来語の動詞化の基準に関する仮説を立てた。澤田論文における仮説では、原語の用法が動詞である語、そして、ある事象の変化や行為を示す語が動詞化される傾向にあることを示唆している。しかし、これらの仮説の検討及び立証や、外来語と和語・漢語との使い分けの調査については、今後の課題として示されている。

2.3. 先行研究と本研究の位置付け

2.1 及び 2.2 節では、外来語の特徴及び外来語サ変動詞の先行研究についてまとめた。また、前節では澤田（1993）にて提唱された、外来語が動詞化する基準についても言及した。しかし、澤田論文で選定された基本語彙には、「クリックする」「インストールする」などの IT に関する語が基本語彙の中に含まれていないと Mogi（2012）が指摘するように、日常的にサ変動詞化されて使われる外来語は、現在では更に増加していると考えられる。その上、外来語の動詞化の基準についてより詳細に述べられた研究は、澤田論文の仮説検証を含め、筆者の知る限り見られない。それにも関わらず、日本語母語話者が普段どのような外来語（カタカナ語）を動詞化させて使用しているか、また、母語話者によって暗示的に共有された動詞化の基準は、これまでの研究では触れられて来なかった。

したがって本研究では、外来語のサ変動詞化について、日本語母語話者による許容度判定の面からその基準を明らかにする。

2.4. 研究課題と仮説、本研究における「外来語」の定義

本稿では、先節（2.1 及び 2.2 節）の先行研究をもとに、以下の研究課題と仮説を立てる。

研究課題：日本語母語話者が動詞化すると考える外来語の意味的特徴は、どのようなものか。

仮説：「日本語における」外来語そのものに原語からの意味変化が起こっている場合は、その変化が起こった後の意味における語使用が優先される。

また、調査にあたって、本研究における「外来語」の定義にも言及したい。新村編（2018）

『広辞苑 第七版』では、外来語を「外国語で、日本語に用いるようになった語。狭義では、漢語を除く。」(p.496)と定義している。しかし、外来語は一般的にカタカナで書かれ、その語が外国語由来であると日常的に認識出来る(山田, 2007)との記述もある。

以上を踏まえ、本研究では外来語の定義を以下のように設定する。

「外来語」の定義：一般的にカタカナ表記であり、他言語由来だと広く認識可能な語。

3. 調査概要

3.1. 調査に向けた語選定

2.4節における外来語の定義で言及したように、他言語由来の語は日本語へ借用される際に、より日本語らしい語への変化を経て、日本社会に浸透することによって、日本語における外来語へと変化(「日本語化」)する。しかし、完全に日本語化されたものは本来の「外来語」であると言える一方で、日本語化の途上にある(定着が不十分である)語も多い(日本語学会(編), 2018)。そのため、外国語と外来語の境目が未だ曖昧であることが示唆されており、外来語サ変動詞においても同様の問題が存在すると考える。したがって本稿では、このような日本語化の過程にある、すなわち、日本語母語話者にとって自然な使用例か否か判断し難い外来語サ変動詞に焦点を当て、調査を行う。

このような自然か否か判断し難い外来語サ変動詞を収集するため、本稿では日本語学習者コーパス『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language, 以下 I-JAS)』第一次～第四次データ²を使用し、外来語サ変動詞の出現例を調査文として借用した。また、検索ツールには国立国語研究所提供「中納言」を利用した。本コーパスから、「名詞(語種: 外来語)」及び「する(品詞の大分類: 動詞, 活用型: サ行変格)」を検索し、発話データから全ての対象語を抽出した。その結果、日本語学習者データから抽出した外来語サ変動詞は延べ92語、64種類であった。³また、同コーパスの日本語母語話者データからも同様に対象語を抽出し、延べ12語、9種類の語を得た。

次に、アンケート調査に使用するための語の選定を行った。選定には、①日本語母語話者の内省(筆者の主観的判断)、②日本語学習者向けカタカナ語教材(佐々木監修, 2001)、③外来語(カタカナ語)・略語辞典(堀内監修, 2013)、④国立国語研究所提供『現代書き言葉均衡コーパス (The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 以下 BCCWJ)』による検索、の4種類を使用した。それぞれの媒体の選定理由は、明らかに許容度が高くなると思われる語を予め除外するため(①母語話者内省)、外来語(カタカナ語)の用例にサ変動詞化するとの旨が明示されているため(②佐々木監修(2001)及び③堀内監修(2013))、そして、日本語における使用例が存在するかを確認するため(④BCCWJ)、である。以上の4媒体において、各外来語がサ変動詞化するかどうかをそれぞれ判断し、4つのうち3つ以上においてサ変動詞化しない、または不明と判断された語を次段階のアンケート調査に使用した。選定の結果、全57語を許容度調査に使用することにした。なお、選定された語については紙幅の都合上、「4. 許容度順位の結果」に纏めて示す。

なお、使用語の選定には一部例外も存在する。本研究では日本語学習者における発話データの使用を主とするが、日本語母語話者データも一部含んでいる。日本語母語話者データにおいても、学習者データと同様の4媒体を選定に使用しているが、「サ変動詞化しない」とされた媒体が3未満であっても、後述する理由により一部調査語に含めた。また、BCCWJ

² コーパスデータの収集当時(2019年8月～9月)は第5次データが未公開であったため、本研究では対象外である。

³ 中納言での検索時に「煙草する」「天ぷらする」も同様に外来語サ変動詞として抽出された。しかし、2.4節で述べた外来語の定義に適さないため、本稿では研究対象語から除外した。

中の用例において、I-JAS データにおける使用状況と対応する語があった場合も、同様に例外として含めた。

これらの例外語を調査に含めた理由は、仮説の検証を目的とした語の比較対照を行うためである。同じ語にも関わらず意味が異なる場合の許容度の相違を見ることによって、日本語母語話者に一般的に認識されている外来語の意味や、それらの特徴はどのようなものかを考察する。

3.2. 許容度調査

3.1 節で選定した調査語彙をもとに、『カタカナ語動詞に関する許容度調査』と題してアンケート調査を行った。本調査では、選定した外来語サ変動詞を含む短文⁴を提示した。それから、一般的な使用を想定した上で、使用されている語が自然か不自然かどうかを4件法で判断する許容度判定を行った（「問題なく使うことができる、自然（4）」～「使うことが出来ない、不自然（1）」）。また、調査で使用した短文の共起名詞や格関係は、適宜 I-JAS 上のプレインテキストを参照し、可能な限り元データの発話状況に基づくよう設定した。

調査対象者は、日本国内の大学・大学院に在籍する日本語母語話者である。2019年9月25日から2019年10月15日にかけて調査が行われ、89件の有効回答を得た。アンケートは Google フォームを用いて作成し、SNS や立命館大学文学部の小集団クラス等を通じて URL を配布した。

また、許容度調査を行うとともに、フェイスシートによるインフォーマントの属性調査も行った。調査項目は、(1)性別、(2)年齢、(3)所属（学部生・大学院生）の3つである。本調査のインフォーマントの属性については、以下の表1を参照されたい。

表1 インフォーマントの属性

性別	【男】32人／【女】59人／【未回答(回答しない)】4人
年齢	【18-20歳】36人／【21-23歳】36人／【24-26歳】10人／ 【27-29歳】2人／【30-32歳】1人／【33-35歳】1人／【35歳以上】1人
所属	【大学(学部)生】70人／【大学院生(修士・博士前期)】12人 【大学院生(博士後期)】2人／【その他】1人／【未回答(回答しない)】4人

4. 許容度順位の結果

調査対象語は、3.1 節で選定した外来語サ変動詞 57 語である。これらの語を、3.2 節の調査方法にしたがってアンケート調査を行った。なお、全体の許容度平均値は 2.23 であった。

以下の表2に、各調査対象語の回答状況と許容度平均を降順にて示す。

⁴ 表2のうち、文末に「*」が付けてある例文は日本語母語話者データに基づいたものである。また、「※」が付けてある例文の外来語サ変動詞は、元データでは連体修飾節として出現していたが、本調査で使用する語を「～する」の表現に統一するため、格関係を一部変更した。

表2 調査対象語ごとの回答状況と許容度平均値（降順）

順位	例文	4 (自然)	3	2	1(不 自然)	許容度 平均	標準 偏差
1	このドラマは世界的に「ヒットした」*※	87	1	1	0	3.97	0.24
2	友達と遊んで「オールする」*※	81	5	3	0	3.88	0.42
3	友達に「バイバイする」	81	6	0	2	3.87	0.50
4	自身の体力を「セーブする」	75	11	1	2	3.79	0.57
5	「トータルする」と半年になる *※	75	9	2	3	3.75	0.66
6	パソコンで文字を「タイプする」	70	14	2	3	3.70	0.68
7	流血を見て「フリーズする」	65	12	9	3	3.56	0.81
8	スイッチを「オフする」	63	9	7	10	3.40	1.04
9	歌手が曲中で「シャウトする」	58	16	3	12	3.35	1.06
10	魚を油で「フライする」	53	17	7	12	3.25	1.08
11	髪の毛を「ウェーブする」	33	30	14	12	2.94	1.04
12	出稼ぎの日系人を「リクルートする」	33	27	10	19	2.83	1.15
13	駐車場に「パーキングする」	32	22	19	16	2.79	1.12
14	大自然の中を「トレッキングする」	39	13	15	22	2.78	1.25
15	絵を「ペインティングする」	29	22	18	20	2.67	1.16
16	ヒーローが悪者と「ファイトする」	22	32	17	18	2.65	1.07
17	魔法で異世界に「トランスポートする」	29	19	21	20	2.64	1.16
18	突然のことに驚き「パニックする」	29	17	16	27	2.54	1.23
19	臓器を病人に「ドネーションする」	23	26	15	25	2.53	1.16
20	このプログラム言語で「コーディングする」*	25	12	23	29	2.37	1.21
21	自転車に車が「ヒットする」	17	20	26	26	2.31	1.09
22	蛇を銃で「シューティングする」	16	19	30	24	2.30	1.06
23	海外からの留学生を「ホストする」	20	15	25	29	2.29	1.15
24	飛行機で海外へ「トラベルする」	18	20	20	31	2.28	1.15
25	車を「ドライビングする」	18	16	20	35	2.19	1.17
26	野菜と肉を「フライドする」	15	18	23	33	2.17	1.11
27	仕事を「ミステイクする」	5	20	36	28	2.02	0.88
28	見知らぬ人を「キルする」	11	20	16	42	2.00	1.10
29	異なる場所の景色を「コントラストする」	10	16	27	36	2.00	1.02
30	プレゼントを「ピックする」	7	19	27	36	1.97	0.97
31	日本で「ワークする」	9	13	31	36	1.94	0.98
32	政府の新たな政策に「レジスタンスする」	6	17	26	40	1.88	0.95

33	忘れ物に気づき「シャウトする」	8	16	21	44	1.87	1.01
34	友人を危機から「セーブする」	7	12	27	43	1.81	0.95
35	家を「レントする」	5	17	23	44	1.81	0.94
36	車を「パークする」	6	13	24	46	1.76	0.94
37	果物を「ドライする」	9	7	26	47	1.75	0.98
38	研究に「ワークする」*	6	9	24	50	1.67	0.91
39	車で「アクシデントする」	5	8	28	48	1.66	0.88
40	書籍を「パブリケーションする」*	3	15	20	51	1.66	0.87
41	映画が「ハッピーエンディングする」	5	9	21	54	1.61	0.89
42	弟の誕生日を「セレブレーションする」	3	10	24	52	1.60	0.82
43	ものを「アSEMBルする」	2	13	20	54	1.58	0.89
44	みんなが「ハッピーする」	7	3	25	54	1.58	0.82
45	チャンピオンシップに「ウィンする」	4	7	25	53	1.57	0.86
46	大学の学籍を「フリーズする」	5	7	22	55	1.57	0.82
47	学校を「グラデュエイトする」	3	9	22	55	1.55	0.81
48	木の枝が「クラックする」	4	6	22	57	1.52	0.81
49	客が店の料理に「コンプレインする」	3	3	23	60	1.43	0.72
50	家に帰って来て「ドアベルする」	4	7	11	67	1.42	0.82
51	学生アルバイトに「レジストレーションする」	2	6	19	62	1.42	0.72
52	コートを「ハングする」	0	4	22	63	1.34	0.56
53	良い知らせに「ラッキーする」	3	3	14	69	1.33	0.70
54	調査を「エクスペリメントする」	2	2	18	67	1.31	0.63
55	巨万の富を手に入れ「ハピネスする」	2	1	18	68	1.29	0.61
56	友人が帽子を「ウェーブする」	0	5	14	70	1.27	0.56
57	子どもが「ハイパーする」 ※	1	3	11	74	1.22	0.56

5. 分析結果

5.1. サ変動詞部が同じ調査語における許容度の比較分析

本章では、「共起名詞は異なるが調査語自体は同じ文のペア」及び「外来語名詞部の語尾は変化しているが、元となる語は同じだと考えられる調査語のペア」計8組について、許容度の相違が生じた原因を述べる。本章で対象とする例文、許容度平均及び有意差⁵の一覧は、以下の表3の通りである。

⁵ 許容度平均の有意差の検定にはマン・ホイットニーのU検定を用い、関西大学の水本篤氏作成のWebアプリケーション『Langtest Version 1.0』(<http://langtest.jp>)によって計算を行った。

表3 サ変動詞部が同じ語のペアの一覧

	順位	例文	許容度平均	有意差 ⁶
1.	1	このドラマは世界的に「ヒットした」*※	3.97	***
	21	自転車に車が「ヒットする」	2.31	
2.	4	自身の体力を「セーブする」	3.79	***
	34	友人を危機から「セーブする」	1.81	
3.	13	駐車場に「パーキングする」	2.79	***
	36	車を「パークする」	1.76	
4.	10	魚を油で「フライする」	3.25	***
	26	野菜と肉を「フライドする」	2.17	
5.	11	髪の毛を「ウェーブする」	2.94	***
	56	友人が帽子を「ウェーブする」	1.27	
6.	7	流血を見て「フリーズする」	3.56	***
	46	大学の学籍を「フリーズする」	1.57	
7.	9	歌手が曲中で「シャウトする」	3.35	***
	33	忘れ物に気づき「シャウトする」	1.87	
8.	31	日本で「ワークする」	1.94	*
	38	研究に「ワークする」*	1.67	

5.2. 原語における意味での使用と意味の特殊化

許容度の相違が起こる原因の1つに、文脈による外来語の意味の違いが挙げられる。

特に、外来語名詞が、原語における意味そのままで使用されている際に、許容度平均が低くなる傾向にあると考えられる。また、Shibatani (1990) や沖森・阿久津編 (2015) が言及したように、日本語における外来語には、特定の意味のみでの使用がなされる「意味の縮小・特殊化」が見られる。この特徴が、外来語サ変動詞の許容度にも影響していると考えられる。

前項表5の1.「ヒットする」を例に挙げると、「このドラマは世界的に『ヒットした』」の許容度平均は3.97である一方、「自転車に車が『ヒットする』」の許容度平均は2.31と、数値がやや低くなった。マン・ホイットニーのU検定の結果、両群の間に有意差が認められた ($U=816.5, p=.00, r=.77$)。

佐々木監修 (2001) の日本語学習者向け教材では、「ヒット」は「大変な人気になる」の用例のみが記載されている。また、堀内監修 (2013) においても、以下の用例が記載されている。

- ヒット【hit】(～する) ①[野球]安打(する)。②小説・演劇・レコードなどが大当たりすること。③つりで魚が掛かること。④ホームページを見るときファイルの総数。⑤成功。⑥検索で見つけ出す。検索で引っかかる。ダウンロード(アクセス)する。情

⁶ * = $p < 0.05$, ** = $p < 0.01$, *** = $p < 0.005$

報や答に行きつく。

(堀内監修, 2013:574)

一方, Hornby (2015) によると, 「自身の手や持っているもので, 他の事物に勢いよくぶつかる」(p.745, 筆者訳) の用例が主であり, 英語の hit においては「人気を得る」やその類義は記載されていない。

したがって, 「このドラマは世界的に『ヒットした』」の用例における「ヒット」は, 「人気になる」の意味で使用されている。これは日本語における一般的な「ヒット」の認識の1つである。対して, 「自転車に車が『ヒットする』」は原語(英語)における「ぶつかる」の意味そのままで使用されたと考えられる。ゆえに, 同じ語でも許容度に差が出たのではないだろうか。表5の2., 5., 6., 7. においても同様のことが言える。

しかし, 8. 「ワークする」においては, 「日本で『ワークする』(許容度平均:1.94)」「研究に『ワークする』(許容度平均:1.67)」共に許容度平均がやや低く, 例外的だと言える。マン・ホイットニーのU検定の結果, 両群の間に有意差が認められた($U=3304.5, p=.03, r=.155$)。

前者は原語における「働く, 勤める, 仕事をする」の意味をそのまま使用した例であると考えられるが, 後者はそれ以上に許容度が低くなっている。BCCWJで「ワークする」の用例を検索したところ, 全9件の用例のうち, 4件が特定目的・国会会議録, 3件が図書館・書籍コーパス, 残りの2件が特定目的・ブログコーパスからの出典であった。以下は, BCCWJにおける「ワークする」の用例である(下線部筆者)。

(1) 中央突破を図るという手法は, 国民的合意を形成する上で全くワークしていない。
(『社会保障の財政改革』2005)

(2) それなりに私は今まで準備をしまいりました対応というものはワークしたと思います。

(『国会会議録 第132回国会』1995)

このように, 「ワークする」は「(何かしらの事物に) 働きかける, 結果を出す」という意味で使用されることもあると考えられる。また, 堀内監修(2013)では, 「ワーク」の意味を「①働く。働き。②工事。仕事。③製作。作品。④練習。研究。」(p.845)と記している。ゆえに, 「研究に『ワークする』」も意味の特殊化が起こっていると言える一方, 日本語における外来語の「ワーク」は「仕事・労働」や「作品」といった意味での認識が一般的である⁷ため, 許容度が低くなった。

5.3. 原語の接尾辞との関連性

前項では外来語名詞の意味による許容度の相違に言及したが, 原語における語の接尾辞も許容度に影響を与えられられる。

表5の3.は, 「パーキング(parking)する」と「パーク(park)する」という, 接尾辞-ingの有無による比較である。前者は許容度平均が2.79である一方, 後者の許容度平均は1.76であった。『ジーニアス英和辞典 第5版』(南出編, 2015)によると, -ingには動詞に付いて現在分詞を作るほか, 動作やその結果を示す動名詞・名詞を作る役割もあるという。

また, ビタン(2016)によると動名詞「パーキング(park-ing)」は, 辞書において名詞的意味が先行する語である。このような名詞的意味が強い語が日本語に借用される場合, その語の名詞における意味がそのまま借用されるため, 動詞的意味の強い語と比較して, 名詞的意

⁷ 「ワーキングホリデー」「ワークショップ」「ハローワーク」などの複合名詞・固有名詞における「ワーク」にも同様の意味を含意すると考えられるが, 本稿の範疇から外れるため, 議論は割愛させて頂く。

味の強い語の辞書形には「～する」の付加が起こりにくいと指摘されている。更に、同論文では「日本語母語話者は『～ing』形を動詞らしく捉え、行為、活動などの意味を持つ印象を強く受ける」(p.67)との記述もある。また、澤田(1993)による仮説(2.2節参照)においても、同様の旨が指摘されている。したがって、本調査における日本語母語話者は、「パーキングする」の方に「(駐車場に)車を停める」という動作性をより強く表すと感じ、許容度がより高くなったと考えられる。

対して、4.「フライ(fry)する(許容度平均:3.25)」「フライド(fried)する(許容度平均:2.17)」においては、接尾辞-edの有無による相違である。南出編(2015)による-edの記述によると、規則動詞に付けることによって過去・過去分詞形を作る役割のほか、名詞に付けて『…を持った』『…を備えた』『…のある』『…のような』の意の形容詞を作る」(p.673)役割も持つ。日本語内における「フライド(fried)」は、「フライド[チキン/ポテト/オニオン]」のように、揚げ物を表す名詞に使われる場合が多く、これらの語では形容詞的用法で使われている。そのため、「フライド」単体で「する」をつけて動詞化することは、日本語母語話者にとってはやや不自然に思われたと考える。

6. まとめと今後の課題

先章(第5章)では調査結果に基づき、語の特徴における許容度平均の相違について分析した。その結果、原語からの意味の特殊化が起こっている語ほど許容度が高くなる傾向にあると分かった。これらの結果から、2.5節で述べた仮説は概ね立証された。

したがって、日本語母語話者にとって外来語がサ変動詞化する基準には、その外来語が日本語において「一般的に使用されている意味か」が最も影響していると考えられる。また、その要因には、原語の本来の意味からの縮小や特殊化も関わっており、あくまでも個人が考える「母語(日本語)」の範囲内で、一般的な「外来語」かどうか、対象となる外来語の意味が文脈に適しているか、という判断に依拠するだろう。それらが本稿の許容度調査においても優先されたと考える。更に、許容度の相違は、外来語サ変動詞それ自体のみならず、共起名詞にも影響すると考える。例えば、「見知らぬ人を『キルする』」という文と、「オンラインゲームで敵を『キルする』」という文とでは、外来語サ変動詞自体の意味は同じにも関わらず、許容度が異なってくると予想される。しかし本稿では、共起名詞による許容度の相違まで明らかにすることは出来なかった。

以上より、本稿では外来語や外来語サ変動詞に関する先行研究を踏まえ、日本語母語話者を対象とした外来語サ変動詞の許容度調査を行った。その結果、外来語研究でも今まで指摘されてきた日本語における外来語の意味の縮小・特殊化が、外来語サ変動詞における許容度にも影響を受けていることが明らかになった。これらの研究結果は、かねてより議論されてきた外来語サ変動詞における動詞化及び「外来語」と「外国語」の基準について、新たな側面から貢献し得ると考える。

最後に、今後の課題を2点挙げたい。1点目は、動詞化の許容傾向をより明確にするために、用例数・調査人数を増やした量的な調査を行う点である。本研究で明らかとなった結果をより一般化された基準に近づけるためには、より多くの用例を検討すると共に、より幅広い属性の日本語母語話者に調査を行なうべきである。また調査文には、先章(第5章)でも述べた共起名詞による許容度の相違も含めたい。2点目は、日本語母語話者における外国語の理解・運用能力および海外滞在経験と、外来語サ変動詞との許容度における関連性の検討である。英語・英語圏の国に限らず広い範囲で許容度の比較を行なっていくことで、新たな知見が生まれると考えられる。これらを踏まえ、より量的かつ詳細な調査を行い、動詞化の基準をより明確にしていきたい。

参考文献

- 沖森卓也・阿久津智(編) (2015) 『日本語ライブラリー ことばの借用』朝倉書店.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2004) 『言語学 第2版』東京大学出版会.
- 佐々木瑞枝(監修) (2001) 『アカデミック・ジャパニーズ 日本語表現ハンドブックシリーズ5 よく使うカタカナ語』アルク.
- 澤田田津子 (1993) 「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要 (人文・社会科学)』42(1), pp.225-239.
- 新村出(編) (2018) 『広辞苑 第七版』岩波書店.
- 鳥飼玖美子 (2007) 「カタカナ語に見る意味のずれ」『言語』36(6), pp.52-59.
- 日本語学会(編) (2018) 『日本語学大辞典』東京堂出版.
- ビタン・マダリナ (2016) 「機能形態素-ing を含んだ外来語の形態・用法の特徴—『～する』動詞化の可否をめぐって—」『筑波日本語研究』20, pp.50-74.
- 堀内克明(監修) (2013) 『現代用語の基礎知識 カタカナ外来語略語辞典 第5版』自由国民社.
- 南出康世(編) (2015) 『ジーニアス英和辞典 第5版』大修館書店.
- 茂木俊伸 (2015) 「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—『マークする』を例として」『文学部論叢』106, pp.83-95.
- 山田雄一郎 (2007) 「現代のコミュニケーションと外来語」『言語』36(6), pp.22-29.
- Horie, K. & Occhi, D. (2001). Language Contact Meets Cognitive Linguistics: A Case of Getto-suru in Japanese. Horie, K. & Sato, S. (Eds.), *Cognitive-Functional Linguistics in an East Asian Context*, pp.13-33. Tokyo, JAPAN: Kuroshio Publishers.
- Hornby, A. S. (Ed.). (2015). *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Mizumoto, A. (2015). Langtest (Version 1.0) [Web application]. Retrieved from <http://langtest.jp>
- Mogi, T. (2012). Towards the Lexicographic Description of the Grammatical Behaviour of Japanese Loanwords: A Case Study. *Acta Linguistica Asiatica*, 2(2), pp.21-34.
- Shibatani, M. (1990). *The languages of Japan*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

使用コーパス

- 『現代書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』中納言, ver. 1.1.0, 国立国語研究所, 2011.
(<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)
- 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』, 国立国語研究所.
(<http://lsaj.ninjal.ac.jp>)